

選挙とその前後

いよいよ政界出馬を決心したものの、一向に解散になる気配はない。吉田首相は講和締結に伴う跡始末までこの際、一気にやっつてのける決意でいたようだ。といって政治は水物、何時解散になるか判らない。近いようでもあり遠いようでもある。このように半殺しのままで置かれるというのは、われわれにとって決して楽なものではない。早く解散があつて欲しいという私の心理は、入隊した兵隊がなるべく早く戦地に行つて実戦に参加してみたいという心理と一沫似通うものがあった。池田さんは私になるべく田舎に帰るようにといつて勧めてはくれたが、田舎に帰るといつてもそう無闇に帰れるものではない。東京でやり遂げなければならぬ仕事がある。それが山程ある。それに田舎に帰つて一週間行脚したとしたら、その間に依頼された諸々の仕事に一応の結末をつけるためには少くとも一カ月はかかる。又帰省に際してはどうしても多少の経費がかかる。こういうことをこれから一カ年もやらねばならぬとしたら、それは大変なことであると思つた。私は身勝手に一日も早く解散になることを希望していた。ところが昭和二十

七年の八月末、衆議院はいよいよ解散されて、総選挙戦は九月五日から戦われることになった。その九月五日私は退官の上、六日立候補の届出を了えて、初陣の選挙戦に出陣したのである。

選挙ということは私にとつては初めてのことであるから、布陣の一切は人任せにしてこれに介口することはなるべく避けた。又介口するだけの経験はもとより知識の持ち合せもなかった。唯私は敵を誹謗するようなことは絶対しないように一同にお願いしておいた。そしてこれだけのエチケットは最後までどうにかみんなによつて守っていたかと思つてゐる。又私は自分で確信がもてることだけを演説の中で言つたつもりである。人間であるからその言動に多少の誇張や虚飾のあることは、偽悪者でない限り或る程度避けることができないことではあるが、なるべくそのようなことのないように心懸けた。私は私の属する自由党の選挙公約というものに精通してゐない許りか、それに興味をもつてゐなかつた。

私の演説はインフレーションを抑制して通貨の価値を維持することが、経済発展の基礎であり、道義確立の基礎であり、社会秩序維持の前提であるから、このことが政治の職責のうちで一番大切なことであることを力説した。そしてそのためには、お金を大切にするといい慣行が国民の間に根強く打立てられなければならない。政府がよけいに金を国民から巻き上げる

よりも、減税によつて国民の懐になるべく多くのお金を残すような政治を行うことが、その目的を達する一番有効であり適切な手段である。従つて財政の緊縮整理を断行して、安くつく政府（Cheap Government）をつくつてゆかなければならない所以を強調したのである。つまり、いわば古典的な財政経済の理論を耳馴れない田舎の人々の前でやつてのけたのであるから、私の演説は一向に人々の反響を呼び共感をかちとることができなかったように思う。拍手をしてくれる場面も殆んどなかった。中には大きい口を開けてアクビをされる老人もいた。それでも私は決してそのペイスを変えるようなことをしなかった。目先の御利益を誇張的に宣伝して、有権者の歡心を買うようなことは、いやしいことであると思つた。国民の良識がいつの日か廠正な審判を、かかる言動に下すに違いあるまいと思つていた。民主主義というものは、国民の良識を基調にもっているのだから、もし無責任な煽動が勝利を民衆の中に永遠に打立てるようなことがあるとしたら、私はむしろ私の方から民主主義との絶縁をも敢て辞さない積りだ、という氣負つた氣持をもつて、自分自身に言い聞かせていた。

私は選挙民の中に立っている候補者としての自分を意識した。又この人々が自分の敵であるという同僚候補者と対決せる自分の姿をも意識していた。しかし、その意識はどちらかと言え

ばおほるなものであった。敵に対する闘志というものは殆ど湧かなかつた。むしろ私は選挙戦というものは、どうも人との戦いであるよりも、より多く自分との戦いではなからうかと反省していた。自分に勝ちきることができたら、必ず選挙戦にも勝てるにちがいない。私が戦撃に勝つためには、先ず自分の内奥に潜む嬌慢と怯情に打ち勝たなければいけないのだ。或いは自分にしよつちゅうまつわりついて離れない羞恥心と退嬰心を取除き、短慮と投げやりの心を清算しなければならぬのだ。私はこういう心中の敵と絶えず闘争していたのである。山中の賊は破り易いが心中の敵は破り難い、というのが先哲の述懐であるが、私も自分との戦いにおいてこの苦闘を重ねたのである。戦いを進めるに従つて自分の心中の敵は愈々打破り難いものになつてきた。しかしこうした闘争は、何も一回の選挙戦でけりがつくものではなく、それは一生を通じての課題である。私は選挙戦を通じてその試練を集中的且つ反覆的に体験させてもらったことを、省みて俸せであつたと考えている。これからの選挙も、私にとっては、他の何であるよりも、先ず自分との対決であるに違いないと思つてゐる。

私の同僚候補者佐野増彦君がいみじくも喝破したように、私もまた「選挙自体が即ち政治である」と思つた。あれだけの選挙民を前に自己の所信を述べることができるということは、大

変なことである。この選挙を通じて国民の政治意識はぐんぐん伸びて行く。選挙は従って立派な政治教育の場である。選挙は政治への階梯ではなくて、むしろ政治それ自体である。この選挙をどう闘うかということによって、政党や政党に属する候補者が評価される。信用の度合い決められる。又選挙を通して国民の意志が具体的に表明される。それだけではなく、更には選挙の闘争を通して、国民の意志が形成され洗練され具体化される。選挙は勝敗優劣を争うスポーツではなく、選挙自体がその闘争過程を通して政治を生産して行くのだ。又候補者は、この選挙を通して自分を錬磨すると共に、自分自身の人格を具現して行くのだ。従って「選挙は人なり」ということにもなる。そういう意味で政治を新たに生産してゆこうという選挙は尊いものであり、人格の具現である選挙はいわば聖いものである。一切の虚飾を排し、総ての卑屈を退けて、堂々と闘うべきものである。私は自分の選挙を通じて、しみじみとこのことを感じた。

それにしても、選挙というものは、随分と経費と労力が必要、同時に大きい感情の浪費があるものである。まさかと思つてやってみると、矢張りひどい犠牲が要るものだ。選挙がすんで、しかもこれに勝利を得たのに、何かしら心の底から湧き出る愉悦を覚えなかったのは、こうしたことに因るのであろう。公明選挙というのは、この魔力的現実の滔々たる激流に対するささ

やかな抵抗ではあるが、果してどれだけ実効が上っているものか疑わしい。その罪は往々にして国民の政治意識の低調さとか、道義の頹廢とかに帰せられるが、しかし最大の罪は候補者自身の勇断の欠如に帰せられなければならない。正を踏んでおそれない勇断の欠如である。佐野増彦君が選挙の肅清ができれば政治は自然と立派なものになる、といわれたのは蓋し名言である。それには候補者の勇氣と選挙民の協力が大切である。一気に公明選挙を実現するというのは、なかなかむずかしいことである。しかし日本の政治をよくするためには、何とかして実現しなければならぬことである。そして一步一步私は私の選挙がこの目標に近づいているものと確信して、けわしい山道を登って行っている。